

今帰仁村文化財調査報告書第6集

史跡 今帰仁城跡

第2次発掘調査概報

1982年3月

沖縄県今帰仁村教育委員会

今帰仁城跡第2次発掘調査概報

はじめに

第2次発掘調査は1981年9月1日～1982年1月6日まで第I地区（俗称志慶真門^{シツマツク}）の第4・5・6テラスを発掘した。今年度で第I地区の調査は完了する予定であったが、第6テラスの一部と第1テラスの試掘を終ることができず、第3次発掘調査に引き継ぐことになった。

調査の経過

9月1日～17日までは伐開と第1次発掘調査で発掘した土を第4テラスに積んであったのでその除去作業。第2・3テラスの遺構の上に約30cmの盛土をし、残った土は城外へ捨てる。

9月18日から10月9日まで第4テラスの発掘。10月12日から第5テラスの発掘にはいる。第5テラスは最後まで続き、途中の11月26日からは第6テラスの発掘を並行して行った。

層序

第4テラスは第I層が約20cm、第II層が約20～30cmと薄く、層序的に時期差把握はできなかった。第5テラスでは層厚約130cmの層序が検出された。第5テラスA地北壁断面で見るとつぎのとおりである。

第I層	黒褐色土層（表土層）	約10cm
第II層	オリーブ褐色土層	〃 20cm
第III層	暗褐色土層	〃 20cm
第IV層	オリーブ褐色土層	〃 45cm
第V層	黒褐色土層（炭化米・麦層）	〃 5～10cm

第Ⅵ層	暗黄褐色土層（黄色土粒混入層）	約10cm
第Ⅶ層	黒褐色土層（木炭混入層）	〃10cm

これらの層序で、出土遺物によって時期差の把握ができた。第Ⅰ層～第Ⅲ層までが15～16世紀、第Ⅳ層から最下層の第Ⅶ層までが14～15世紀の層であることが確認できた。なお、第Ⅴ層は炭化米・麦が集中的に検出される層である。

遺 構

(1) 宅地造成

第4テラスから第5テラスへはもともと急傾斜の地形であるが、第4と第5の間に石積みをし、内側に土を入れ、平坦にして第4テラスが宅地造成されている。なお、第5テラスは第Ⅰ地区では最も低いところで、宅地ではないようであるが、第4テラスから第5テラスへ降りる石段（4段）が検出された。

(2) 建物跡

第4テラスには多くの柱穴が検出されたが、その中で1棟だけはプランとしておさえることができた。約4.5m×5.5mのやや長方形の建物で、周囲には計10本の柱が立ち、中には約20cm掘り込んだ炉跡が検出された。建物は昨年検出された第2・第3テラスの建物とほぼ同規模であり、炉を若干掘り込むことも類似している。

(3) 城壁の石積技法

第5テラス東側城壁は発掘前は約25mの石垣であったが、1.3m発掘されて、築城時には約38mの石垣であったことが確認された。城壁の根石まで発掘して、石積技法が確認できた。石垣を積むときは、穴を掘って根石を埋めるか、根石に沿って石を置くかして根石の補強がなされていたのではないかと考えていたが、発掘の結果は、岩盤の上はそのまま岩上に積み上げ、土面の上は地ならしをやってそのまま土面に積み上げていることがわかった。ただ、根石に沿って約15cmの厚さで石の加工片が堆積しており、それが根石の侵食を防ぐ役目をしていただようである。

第6テラス北側城壁の石積技法も確認できた。第6テラスは南から北へ急傾斜の地形で、地上の石垣は崩れ落ちているが、地下に約13mの石垣が埋まっていた。石垣外側は崩れ落ちて明らかではないが、石垣内側で見ると、急傾斜地では地ならしの意味で角礫を敷

きつめ（おそらく石垣外側は角礫面まで石積がされていると考えられる）、その上に石垣を傾斜（外反）を持たせて積み上げている。

出土遺物

（1）土器

前回と同じくグスク土器が10数片検出されたのみで、土器はほとんど使用しなかったと考えられる。

（2）青磁

双魚文皿、蓮弁文碗、砧青磁碗、酒会壺、盤、碗、皿など14～15世紀初頭のものが多い。出土する中国陶磁器の中でも青磁が最も多い。なお、壺、盤など大形のものが多いのも本遺跡の特徴である。

（3）白磁

枢府タイプの白磁碗、口禿白磁皿など14世紀の白磁、口縁が外反する14～15世紀初頭の白磁碗、さらに切り高台の白磁小皿、腰折小皿など15～16世紀の白磁などが検出されている。

（4）青花（染付）

元様式の青花壺、瓶、盤、碗、小壺などが検出された。このように元様式の青花が多くしかも器種が多いのも本遺跡の大きな特徴である。明青花は16世紀のが多く、器種では碗が大部分である。

（5）その他の中国陶磁器

天目茶碗、^付緑釉劃花花唐草文瓶、三彩、翡翠釉、黒褐釉陶器壺などが検出された。

（6）中国以外の輸入陶磁器

白黒象嵌の^本李朝青磁碗、安南鉄絵碗、備前焼すり鉢・瓦質土器（火鉢、その他）・土師質土器などの焼物が検出された。

(7) 鉄器

鍬、刀子、釘、鎌、釣針などが検出された。鍬には2種類あり、刀子にも大小いろいろある。鎌は約8cmの小形鎌で出土例がほとんどない。

(8) 銅製品

金メッキが塗られた鎧に付ける鞋、鉄砲の弾丸などが検出された。鉄砲の弾丸は1個だけであるが、沖縄ではこれまで出土報告がない。

(9) 古銭

古銭は8種で、元豊通宝と洪武通宝が2枚ずつであとは1枚ずつである。五銖が最も古く、洪武通宝が新しいものである。なお、ほかに無文銭が数枚検出された。

第4テラス出土	第5テラス出土
聖暦通宝 (698 唐)	五銖 (B・C122 前漢～A・D502 梁)
元豊通宝 (1078 北宋)	開元通宝 (713 唐)
大定通宝 (1161 金)	大中通宝 (847 唐)
紹熙元宝 (1190 南宋)	元豊通宝 (1078 北宋)
洪武通宝 (1368 明)	洪武通宝 (1368 明)

(10) 祭祀用

青磁の香炉が数点検出されている。ほかにガラス小玉、勾玉なども検出されている。

(11) 石器

砥石は数点検出された。小形の砥石で、短冊形で小孔を穿ち紐を通せるものなどもある。

(12) 炭化米・炭化麦

炭化米・麦が多量に検出された。第4テラス第Ⅱ層、第5テラス第Ⅳ層～第Ⅵ層で検出されたが、特に第5テラス第Ⅴ層では集中的に検出され、炭化米・麦層と呼べる程である。

(13) 獣骨・魚骨・貝殻

獣骨は牛骨とイノシシの骨が多いようである。魚骨はブダイ、ハリセンボンなどが見られるのが、ほとんど同定俵ちである。貝殻類は非常に少ない。

ま と め

第1次、第2次の発掘調査によって第Ⅰ地区（俗称志慶真門）がかなり解明された。傾斜地に土留め石積みをしてテラス状に宅地造成をし、数棟の建物が建っていたことや建物は7、8坪ぐらいの長方形の掘立柱の建物で、中に若干掘り込んでつくった炉跡をもっていたことなどが解明できた。そして、そこには家族単位で生活が行なわれていたことなども理解できた。

第5テラスにおける層序は学問的に意義がある。第Ⅰ層～第Ⅲ層は16世紀の明青花、線刻細蓮弁文の青磁碗などが検出され、15～16世紀の層と考えられるが、第Ⅳ層～第Ⅶ層ではそのような16世紀の遺物は全く検出されず、むしろ14世紀の遺物が多く、14～15世紀の層序と考えられる。遺物の一つ一つについてはまだ検討していないので、詳細については本報告を俟たねばならないが層序的に把握できた意義は大きいと思われる。

中国陶磁器が大量に輸入されているが、これだけの中国陶磁器の出土する遺跡は全国的にもあまりなく、しかも器種の豊富さと質の良さは今帰仁城の力を示しているようである。

(県教育庁文化課主任専門員 金 武 正 紀)
(今帰仁村教育委員会文化財担当 松 田 朝 雄)
(沖縄大学OB 宮 里 末 廣)



PL. 1 第4テラスの土留め石積みと柱穴 (中央より右)
第5テラスの柱穴群と石段 (中央より左)

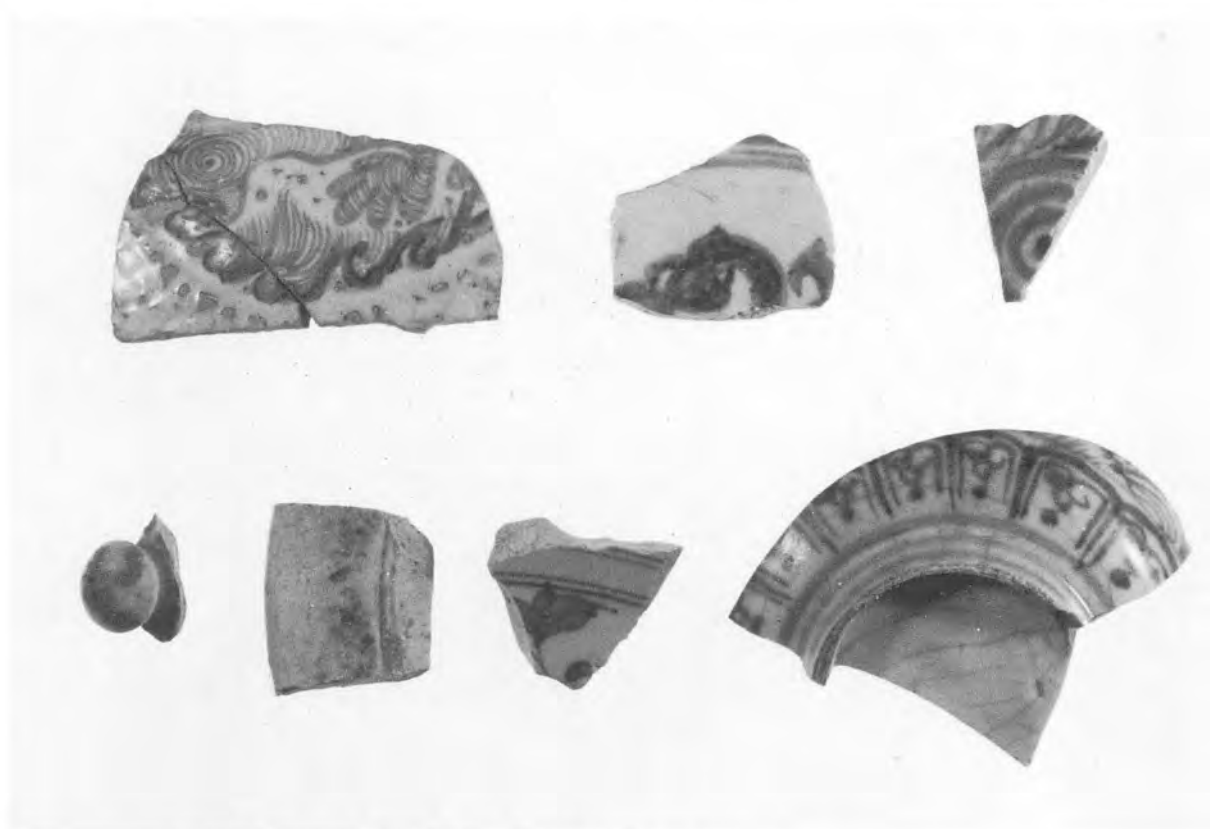


PL. 2 上：第5テラス発掘状況

下：第4・5テラスの発掘状況



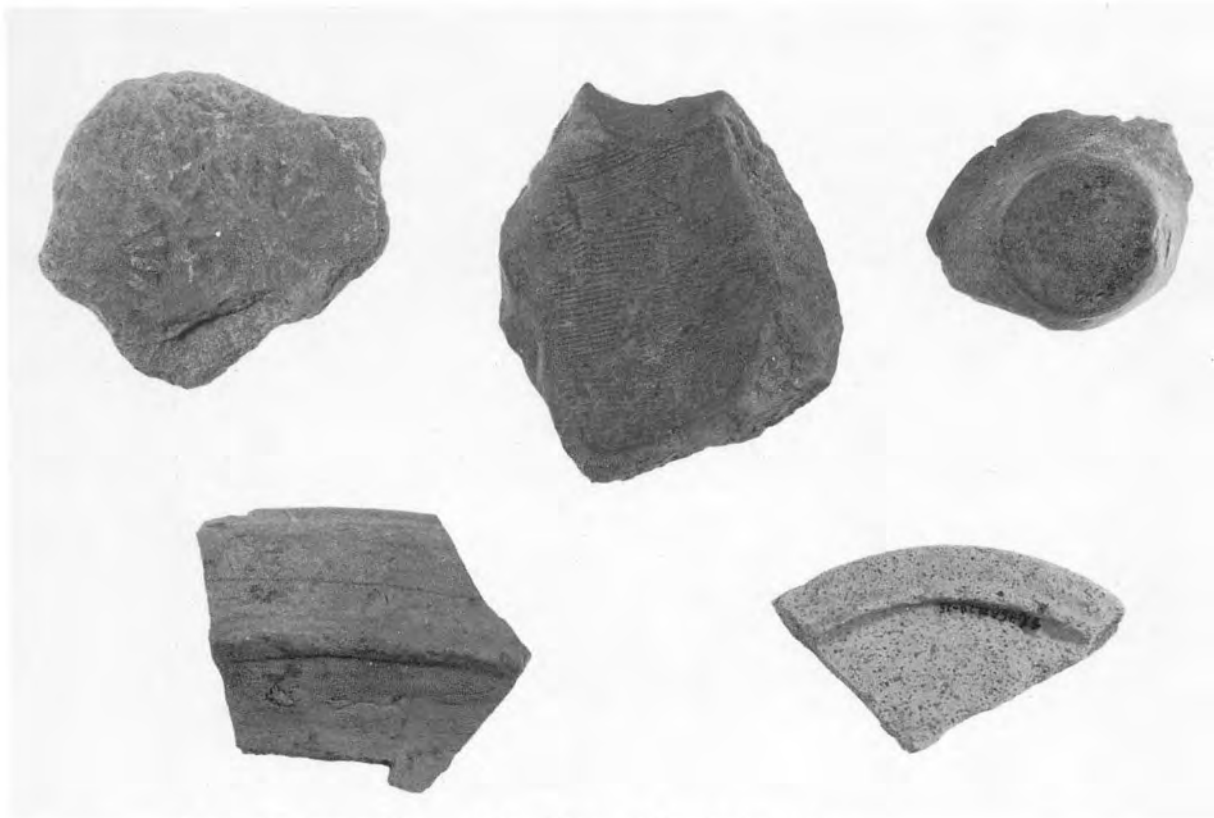
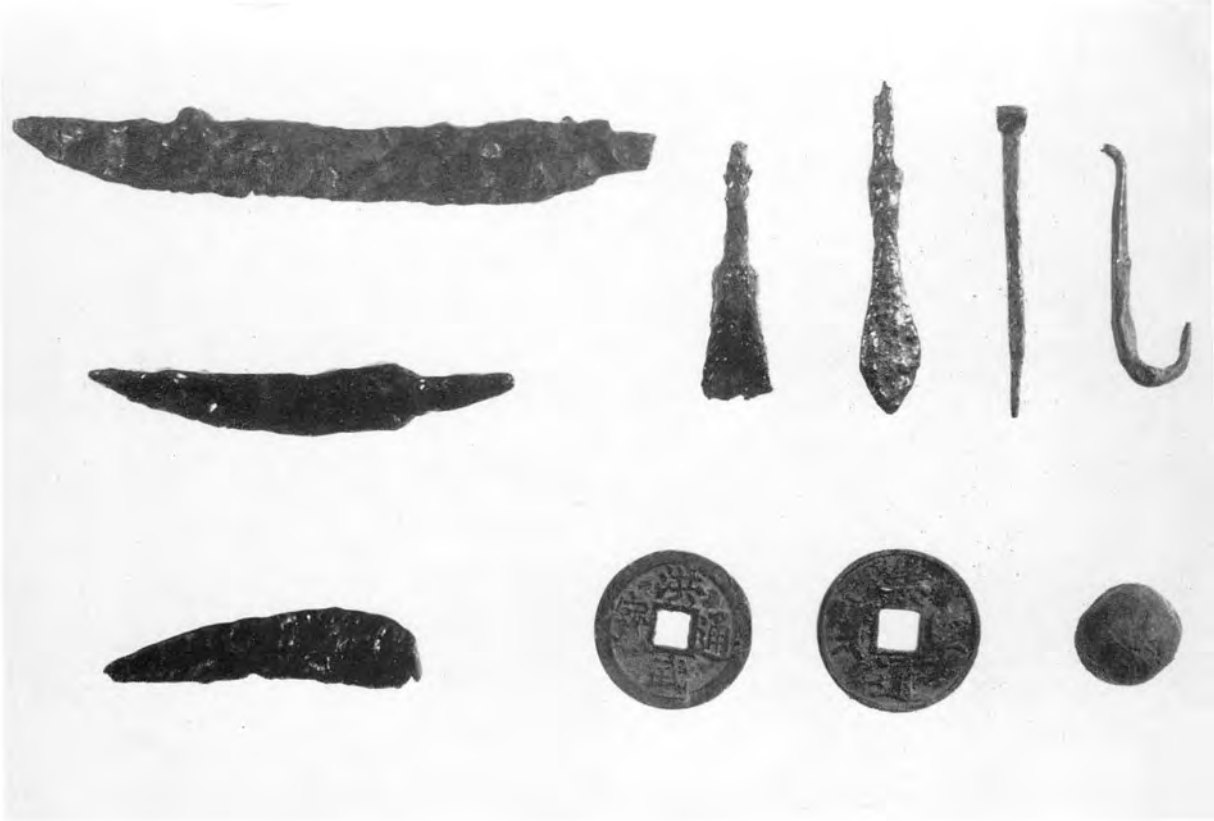
PL. 3 上：第4テラスの宅地造成と建物跡（白線）
下：城壁の石積技法（第5テラス）



PL. 4 上：第5テラスの層序（第Ⅰ～Ⅲ層が15～16世紀
第Ⅳ～第Ⅶ層が14～15世紀）
下：元様式青花（14世紀）



PL. 5 上：青磁皿・碗（14世紀）
 下：綠釉劃花花唐草文瓶（16世紀）、三彩、季朝青磁碗（14～15世紀）



PL. 6 上：刀子、鉄鎌、鉄釘、釣針、鉄鎌、古銭、鉄砲の弾丸
 下：瓦質土器（上段）、備前焼すり鉢（16世紀）、土師質土器